



## 月刊「ボランティア情報」2021 こぼれ話

全国ボランティア・市民活動振興センター

2021年度4月以降に発行しているボランティア情報のなかから、担当者のこぼれ話を中心に、紙面の内容をご紹介します。

お時間のある時に、ちょっと覗いてみていただければ嬉しいです。あわせて、読者アンケートのご協力もどうぞよろしくお願いいたします。



【11月号】福祉教育わたしの実践 取材のこぼれ話。

本山町社協だけではじめて行うこととなった福祉教育。担当の猪野さんは、プログラムづくりからはじまり、緊張の連続だったと話していましたが、今では子どもたちから声をかけられるまでに関わりが深まったといいます。取材では何度も、「わたし一人ではできませんでした」と話されており、福祉教育は担当者のみならず多くの方と作り上げていくものなのだと感じさせられました。



【4月号】福祉教育わたしの実践 取材のこぼれ話。

小学生のときに福祉体験で訪れたデイサービスで自身の祖父の姿を発見！家では笑顔を見せない祖父が、施設ではとても嬉しそうに笑っていたそうです。「ジィちゃんを笑顔にさせる施設と職員さんを見て人を笑顔にする仕事って素敵だなと思いました。その日、初めてジィちゃんの背中を洗ったときに子どもながらに感じるものがありました」と上村さん。その後、福祉の道を志、大学の実習先はなんと現在務めている山鹿市社協。実習で出会った社協職員さんは、道で歩いている地域の人へ声をかけたりかけられたり、、、地域住民に愛されている姿をみて上村さんは社協職員になったそう。なんと現在は、その憧れの社協職員さんが上司となり山鹿市地域を支えています。福祉教育が子どもたちの福祉に興味をもってくれるきっかけになっていること 社協職員の地域での姿が大きな

「魅力」となることをあらためて感じることでできた取材でした。



【5月号】社会課題に挑む 取材のこぼれ話。

ひかり工房の松下さん夫妻は、災害支援ボランティア活動から子ども食堂、そして障害者の就労支援と活動を展開。地元の被災している様子を見て「何かしなくては」という思いからこれまで活動されてきました。現在は、夜の居酒屋経営のお仕事はお子さんに引き継がれ、松下さん夫妻はひかり工房での障害者の就労支援が現在のお仕事に。居酒屋×福祉、こんなところにも接点が！と思わされた取材でした。ぜひ、HP など覗いてみてください！



【6月号】社会課題に挑む 取材のこぼれ話。

医療的ケア児に関わる方のレスパイトを目的としている 親子はねやすめさん 代表理事の宮地さんより。

親子はねやすめが活動を始めて2年目の夏、レスパイト旅行を実施した時、3歳くらいの女の子がとても大きな気づきを与えてくれました。その女の子は、夜だけ呼吸器を装着するお子さんでした。表情はなく、体には力が入らないようで寝たまま動きません。医療者からは、耳は聴こえていると話をもらっていたものの、私に実感などないのですが、それならば声をかけ続けようと思い2泊3日を過ごしました。もちろん反応はありません。眼球が動くことも全くなく、名前を呼んでも無表情。お母様に許可をもらい抱っこさせてもらいながら、話しかけて一方通行のおしゃべりを幾度となくしていました。聴こえているといいなと思いながら。最終日、ご家族を宿泊先のホテルからボランティアさんはもちろん皆でお見送り。みんな手を振りながら、また会いましょう、お気をつけてなどなど声をかけて笑顔いっぱいご家族ごと送り出します。その女の子のご家族の番、無表情でお母様の膝に抱きかかえられながら、動かない手をお母さんが手を振るようにしてバイバイと。その時突然、無表情だった女の子が顔をくしゃくしゃにして、声はでないものの、大粒の涙をぼろぼろと流しながら泣いてくれました。楽しかったんだ。寂しいんだ。その時、初めて対象のお子さんたちは、感じてくれている、分かっている、同じ人間なんだと気づかされました。一緒になってもらい泣きしたこと、今でも私の宝物です。

この出来事を通して宮地さんは「対象児が何よりも頼る一番の支えであるご家族が元気であること。専門性のない人ができること、たくさんあるのだ」と感じたそうです。ボラン

ティア活動の根本の一つには、目の前の人への思いを込めた「声かけ」があるのかもしれませんが。



【7月号】福祉教育わたしの実践 取材のこぼれ話。

表紙の福祉教育実践者紹介では、門真市社協を取材。まずは、学校へのアピールを！と作成したチラシから実践へと発展していくのですが、小椋さんは学校の先生との関係性も重要と話します。先生の異動などもめずらしくないため、異動先の学校でも実施につながるような関係性をつくっておくこと。実際に、異動された先生から異動先の学校での福祉教育もお願いされたそうです。社協は、その地域とつながり続けることができる、ということを改めて実感しました。また、今回の特集は YouTube 特集でした。立川市社協の積極的なアプローチは、本当に圧倒されるものが多く、編集ボランティアについては、関わりのある学校(高校)の先生にも伝えて 生徒へ周知するなどの工夫を行っていました。社協と学校の関係性の重要性を改めて感じます。次号もお楽しみにしてください。



【8月号】特集「離島の社協座談会」後日談

(シンポジウム参加者からの声) 帰宅後、妻に「今日リモートで大島、海士、与那国の離島の社協職員の話聞いたよ」なんて 話をすると、「与那国って、あの最西端の!？」と驚かれ、大変失礼な話になるが「そんな ところにも社協ってあるんだね」と言われた。「離島!面白そう!」と単純に話を聞いてみたいと思い、申し込みましたが、社協という 組織の大きさを感じた。それぞれの地域で、地域の特色を活かしながら地域福祉を推進している人たちがたくさんいるということを知り、やる気が出た。これからも、我が町らしさを 出しながら、地域の人たちと一緒に地域づくりを展開していきたい。とのお声が寄せられました。社協という組織の大きさと、地域づくりがたくさんの場所で行われていることを 感じたシンポジウムでした。離島の社協シンポジウム、好評であれば来年度も...? 次号もお楽しみにしてください。



【9月号】特集 想いを紡ぐフードバンク と 社会課題に挑む

離島の特集を8月号に行いました。続く今回も、沖縄県内の離島、宮古島で社協が取り組むフードバンクをご紹介いたしました。生活が苦しい方への支援の一つ、そしてアウトリーチにもつながった「フードバンク事業」。沖縄県の支え合いの文化のうえに、市内のあらゆる団体が共に取り組みを進めている様子がうかがえます。そんな、「んまんま」のロゴもお手製のもの。想いが詰まった「フードバンク」の取り組み、ぜひご一読いただきたい内容になっています。

社会課題に挑むでは、少年院等で過ごす子どもたちがボランティア活動に取り組む様子をご紹介。在院性は、ここでつくられた地域との関わりをもとに地域住民の一人として暮らしていきます。ボランティア活動は、「人のため」になり、「自分の存在を肯定する」だけでなく地域とつながる、そんなきっかけとなるのだと改めて感じることでできる取材でした。



【10月号】社会課題に挑む 取材のこぼれ話。

ヤングケアラーが注目をあび、その実態が少しずつ見えてきています。今回の社会課題に挑むでは、「きょうだい」のあつまるきょうだい会を社協が運営している実践を紹介しました。子どもの頃の当たり前は年齢を重ねるごとに当たり前ではないこととなっていきます。そこに、戸惑いや葛藤を感じたり。同じきょうだいでも、感じ方考え方はさまざまということに気づきます。ある方は、「わたしは結婚相手を見る目が人よりもある、だって、自分の家族のことを理解しようとしてくれない人とは結婚できないから」と話されていたそうです。家族の形はさまざまであること、そして誰もが大切にされる権利があることを、子どもたちが子どものうちに心にとどめられるようになればいいなと願います。